

「現象学的還元」の思想の源流

堀 栄 造

本稿はフッサールが一九〇四年から一九〇九年ないし一九一二年にかけての遺稿において展開した思索のうちに「現象学的還元」の思想の源流を看取り、それが如何なる問題状況の中で如何なる連関から産み出されたのかを吟味し、そしてまた「現象学的還元」の具体的遂行としての現象学的反省のあり方は如何なるものであるかを考察することを主眼とする。

本稿は先ず以てフッサール『アナーナ二十三巻』⁽¹⁾（一九八〇年）、とりわけその編者による序文に依拠しながら、『イデーナ』⁽²⁾（一九一三年）に先立ってゲッチンゲン時代のフッサールが苦悩しつつ展開した思索の足跡を追ってみようとする。そしてその思索の足跡はまさに「再現作用の学説」の形成へ向けてのものである。それゆえ本稿の（一）においては「再現作用の学説」が如何にして形成されたのかを考察する。この「再現作用の学説」の形成を巡る問題状況の諸連関のうちにこそ「現象学的還元」の思想を産み出す素地が存するのである。

「再現作用の学説」は「現象学的還元」の理念の萌芽とともに

「現象学的還元」を具体的に遂行する現象学的反省のあり方の問題と結び付く。それゆえ本稿の（二）においてはフッサール『アナーナ二十三巻』、とりわけそのZwischenに依拠しつつ、再現作用についての諸分析との密接な関連において、「現象学的還元」の具体的遂行としての現象学的反省のあり方が如何なるものであるかを考察する。

（一）「再現作用の学説」の形成

フッサールは空想 [Phantasie]、像意識 [Bildbewusstsein]、想起 [Erinnerung] についての分析を主として『論理学研究』（一九〇〇・〇一年）と『イデーナ』（一九一三年）との間のゲッチンゲン時代の間に遂行していた。空想、像意識、想起は直観的準現前化作用 [anschauliche Vergegenwärtigung] として総括され、それは直観的諸作用 [anschauliche Akte] の分析の領域に属するものである。

それではゲッチンゲン時代のフッサールにとって直観的諸作用の分析は如何なる意義をもっていたのか。勿論直観的諸作用の分析は『論理学研究』以前においてもなされていたのであり、とりわけ一

九〇四・〇五年の冬学期の講義の基礎となった一八九八年の論文⁽³⁾は既に空想と表象を論じているのであるが、この論文は『論理学研究』が現象学において突き止めようとした表現と意味についての諸問題に関する道に対して、反対側からの、つまり経験および感性的所与の側からの「第二の道」に属していたと認めうる。⁽⁴⁾直観的諸作用の分析はこの「第二の道」において重要な地位を占めるものであり、直観的諸作用の分析に再び着手してそれを深化させることはゲッティング時代のフッサールにとって『論理学研究』において辿られた「第一の道」を補完的に克服するという重大な意義を担っていたにちがいない。ゲッティング時代のフッサールにとつてとりわけ一九〇四・〇五年の冬学期の講義は「第二の道」を改めてより一層深い洞察の下に辿ろうとする企図の画期的な端緒であったといえる。かくしてフッサールは一九〇四・〇五年、再び「第二の道」に向かい、知覚、空想、時間に関する詳細な緒分析を遂行することによって、一九〇〇・〇一年の著作『論理学研究』⁽⁵⁾ではっきりとした形で論じられた構想領圈を越え出たのである。⁽⁶⁾

直観的諸作用の領域の分析の主要な課題の一つは、直接的で直観的な意識つまり知覚ないし現前化作用の端的な根本形式とは、その志向的特性に関して徹底的に区別される直観的現前化作用のあり方をきわだたせることの中に⁽⁷⁾ある。それでは一体ゲッティング時代のフッサールにとって、準現前化作用「Vergegenwärtigung」を現前化作用「Gegenwärtigung」と対比的にきわだたせつつ綿密に分析することの意義は何だったのであるか。そもそもフッサールの直観概念の内的知覚「innere Wahrnehmung」への制限はブレンターノ

による影響を受けつつ一八九四年頃にはどうやら成立していたようであり、以後『形式的論理学と超越論的論理学』(一九二九年)に至るまで内的知覚に制限された意味での直観と再現との記述的發生的関係はフッサールに息をつく暇を与えなかったのであるが、フッサールはブレンターノによって刺激と示唆を受けたものであり、⁽⁸⁾ゲッティング時代にブレンターノを批判的に克服することによって自らの分析を深めた。フッサールは一九〇四・〇五年の冬学期の構義で全く一般的に次のようにブレンターノを非難する。すなわち、ブレンターノに従えば表象そのものの作用性格のうちに全く何ら差違は存在しないというように、そして表象は内容に即してのみ区別されるといふように非難する。⁽⁹⁾つまりブレンターノに対して先ず以て向けられたフッサールの主要な批判は、ブレンターノが表象の作用的側面の厳密な分析を怠っているということであった。したがってフッサールに先立つ時代において知覚表象と空想表象の間の区別という伝統的問題の解明が成功しなかったのは、「客体化的統握の概念が、そしてそれに属する統握内容、統握意味、統握形式の間の区別が欠けていた」⁽¹⁰⁾からだと言張されることとなる。フッサールは表象の作用的側面を強く打ち出す術語として「統握」[Auffassung]という概念を用いているが、この概念によって指示される作用的側面への厳密な分析を欠くブレンターノの学説のうちには如何なる不備の点が見出されるのか。フッサールの批判的眼差しにしてみればブレンターノは「感覚と空想との間の本質的区別を拒んだ。……ここに現れたあらゆる区別はむしろ絶えず媒介された区別である。主要な点からみればそれは強度の相違」[Intensitätsunterschiede]⁽¹²⁾とある。」

そして統握の区別に関しては「その区別はブレンターノに従えば知覚は本来的表象であるが空想は非本来的表象であり、つまりブレンターノにおいては関係[Beziehungen]によって概念[Begriff]によって媒介された間接的表象である。統覚の仕方[Aperceptionsweise]が双方において異なったものであるという単純な思想のうちに一つの重要な進歩があるとはいえ、しかしブレンターノは双方の統握の深く突き進んだ現象学を遂行しはしなかった。(奇妙にもブレンターノは其の際に表象作用のあり方におけるあらゆる区別を否定する⁽¹³⁾)」したがってフッサールはブレンターノが知覚と空想における統覚の仕方の相違を見出している点を重要な進歩として認めつつも、ブレンターノが空想を概念によって媒介された間接的表象とみなす限りにおいて知覚と空想とのブレンターノによる区別を本質的なものとしては認めない。フッサールは知覚と空想についてのブレンターノの学説に刺激と示唆を受けつつも、ブレンターノの学説の作用的側面に関する厳密な分析の欠落に伴う空想概念の不備の批判的克服へと厳然として乗り出すのである。ここにフッサールが空想つまり準現前化作用を現前化作用(知覚)と対比的にきわだたせつつ綿密に分析せんとする一つの主要な契機が、そしてその企図の意義があるといえるのではあるまいか。

しかし準現前化作用を綿密に分析せんとするゲッティング時代のフッサールの厳然たる企図は、ブレンターノの学説の作用的側面に関する研究の不備を克服するという初発的な契機にとどまるものではなく、判断論的諸連関[urteilstheoretische Zusammenhänge]という一つの大きな体系に組み込まれて新たに大きな意義を担うこと

となる。前述の「第二の道」を改めてより一層深い洞察の下に辿ろうとするゲッティング時代のフッサールにとって直観的諸作用の分析は判断論的諸連関における基底をなすものであるが、とりわけ直観的準現前化作用の分析はきわめて重要な意義を担い、枢要にして特異な地位を占めることとなる。

ともかくブレンターノの知覚と空想についての学説を乗り越えようとするフッサールは先ず以て次のような把握へと至る。すなわち、フッサールは空想表象を感性的に直観的な作用、つまり個々の対象を現出へともたらす作用として把握する。そしてフッサールは概念的にあるいは範疇的に遂行される空想作用ないし非本来的な表象作用を単なる「思い浮かべること[sich denken]」諸々の事態の「単なる命題的表象[hohes propositionales Vorstellen]」⁽¹⁵⁾として、はっきりと判断論的諸連関において詳細に取り扱うのである。かくしてブレンターノを乗り越えんとするフッサールの歩みの先ず以て特筆すべき点は、空想表象を感性的に直観的な作用として把握したことである。

このような段階へと至るまでには自己批判的克服もまた不可避のものであった。ゲッティング時代に先立つハレ時代において、フッサールは想起表象ないし予期表象のような直観的空想表象の「非本来性[Uneigentlichkeit]」を知覚表象の本来性に対して、差し当たり像性[Bildlichkeit]というスペチエス的作用性格によって限定しようとした。⁽¹⁶⁾ こうした把握は長年の間施されていた。そうした把握はまた明らかに『論理学研究』の第二巻(一九〇一年)において表現されるに至ったのである。これに対してフッサールは一九〇四・

○五年の講義で以前の自らの学説の問題点を批判的に研究し、次の

ような結論を導く。すなわち、フッサールは今や空想と像意識との内的親縁性およびそれでもやはり両者の鋭い区別性を次のように概念へとみたらしうる。つまり「像意識は空想意識であり、それ自体では対応する空想意識から区別されるものとは全くみなされない」

——このことは今やそれが精確に示された意味での準現前化の意識であることを意味している。⁽¹⁹⁾「しかしそれはこの場合現前化の意識を以て貫かれて」⁽²⁰⁾のであり、それとともにそれは純粹で端的な現前化の意識ではないのである。フッサールはここにおいて像意識と空想意識を明確に区別することによって、直観的空想表象ないし直観的準現前化作用の「非本来性」という規定の変更を招来する。フッサールは一九〇四・〇五年の講義において空想を準現前化作用「Vergegenwärtigung」として把握し、それを現前化作用としての知覚に配置させる図式をとり、そのことによって直観的準現前化作用としての空想はもはや「非本来的」表象作用としては格付けされなくなるのである。⁽²¹⁾かくして知覚と空想との関係は像性を介しての本来の表象と非本来の表象といった関係ではもはやなくなり、統握作用の本質的区別を介しての現前化作用と準現前化作用といった関係として、ゲッティングン時代のフッサールの画期的な獲得物たる意義を有する。ゲッティングン時代のフッサールにとって準現前化作用は非本来的な表象作用であるどころか、むしろフッサールは絶えずそれをはっきりとは言わずに空想、想起および類比的に予期を本来的表象作用とみなしていた⁽²²⁾といっても過言ではない。このように把握された空想表象は直観的準現前化作用として、前述したように感

性的に直観的な作用であると言いうるのである。

ここに準現前化作用を現前化作用の再現とみる「再現作用の学説」の基礎が確立されたのであるが、それは次に「時間意識の学説」と結び付くことによって「変様の理論」を獲得し体系化されることとなる。フッサールが一九〇四・〇五年の講義の第三主要部分で語った知覚と表象との間の（現前化作用と準現前化作用との間の）関係の、並びに直観的準現前化作用一般の本質規定における歩みは、「時間意識の分析」に捧げられた第四主要部分においてある深められた継続を見出した。同時にこの分析の場合、フッサールにとって現前化作用と準現前化作用との間の関係の彼のそれまでの規定にとって指導的であった「内容統握—図式」[Inhalts-Auffassungs-Schema]（感覚「Empfindungen」空想されたもの「Phantasmen」およびそれらに対応する統握）に関する最大の困難が明らかとなった。すなわち、フッサールは根源的な時間意識へと遡行することによって構成的次元へと到達し、その視点からすれば「内容—統握図式」を採る分析は既製のものを分析するといった経験主義的性格を有するものとして批判するべきものにみえたのである。フッサールは一九〇九年だと査定しうる主要テキストにおいて「内容—統握図式」の修正を獲得し、それにおいて次のように語る。すなわち、むしろ意識は徹底して意識にもとづいてあり、空想されたものと同様感覚は意識である。そしてその場合我々は差し当たり知覚を印象的な（原的な）現前化の意識、それ自身そこにあるという意識などとしてもち、空想を再生的に変様された現前化の意識、あたかも現前するかのようなもの、現前する空想の意識としてもつ⁽²⁵⁾と。ここにお

いて内在と超越を一層厳密な意味で区分し一切を意識体験へと還元する「内的意識の学説」が明確な形で確立されたと言いうるであろう。かくして意識は徹底して意識によって成り立っているという事態の洞察のために一九〇九年夏から秋にかけてのテキストで明白に遂行されはじめる経験主義的感覚主義的「内容・統握・図式」の修正は、正當にもフッサールの現象学的意識理論にとって根本的なものとみなされる。

このように「時間意識の学説」の導入を介して「内的意識の学説」がフッサールの現象学にとって確固たる地位を築き上げるに伴い、もはや空想は空想されたものを統握内容とする固有の統握作用として知覚から区別されるのではなく、空想はそれに対応する知覚の変様であるとする「変様の理論」が確固たる意義を担うようになる。つまりこの「変様の理論」は、「時間意識の学説」を中核とする「内的意識の学説」のうちにあって「再現作用の学説」を可能ならしめる決定的契機となるのである。

以上見てきたように、ゲッティンゲン時代のフッサールによる直観的準現前化作用の分析はブレンターノの学説の克服を初発的契機として進展し判断論的諸連関に組み入れられて重要な意義を担うことになるが、他方で「再現作用の学説」を体系的に確立することとなる。そして実はこの「再現作用の学説」が現象学の方法論たる「現象学的還元」の理念と密接な関係にあるのである。それゆえ次の論考においてその問題に言及しなければならない。

(二)「現象学的還元」の具体的遂行としての現象学的反省のあり方

『再生作用ないし二重の準現前化作用の学説の導入のための空想および想起における再現作用の理論について』と題された遺稿²⁶は、一九〇四年から一九〇九年ないし一九一二年にかけてのゲッティンゲン時代のフッサールの画期的ともいえる準現前化作用に関する深化された分析の足跡を如実に物語ってくれる。先ず以ておそらく一九〇四年のものと思われる遺稿^(a)アボリア。同一の現出の二重の統握。すなわち現世的自我との関連における知覚現出の空想としての、あるいは空想自我との関連における知覚現出としての二重の統握。再現作用の意識において一つの現出を描き出すことは、あらゆる空想表象および想起表象の本質に属するか否か。空想表象作用に対する反省⁽²⁷⁾においては、この表題から察せられるように空想自我による統握とそれに対する現世的自我による反省の問題、再現作用の意識の空想表象への本質的帰属性の問題、空想表象に対する反省の問題が扱われる。しかしこれらの三つの問題は別個のものではなく、究極的には空想表象に対する反省の問題に収斂するものである。先ず空想自我による統握とそれに対する現世的自我による反省の問題を見てみよう。空想において私の自我（ある一定の空想された情況、立場における私の自我）に対して対象が対置するのであるが、これは空想自我による対象の統握であり、今や私が空想作用という作用を反省するとき私は現在[Gegenwart]の中にいる。この作用は一つの私の現世的[aktuell]自我に調和する。すなわちこ

の作用は知覚される⁽²⁸⁾。つまり、現世的自我は空想の中に身を置くのではなくむしろ空想の外から現世的な反省の眼差しを向けて空想的統握作用を知覚するのである。空想自我は現世的自我ではなく、それはなるほどこの現世的自我と同一化されるが、あたかも空想自我の空想体験が今や現世的体験でありうるかのような意味においてではない⁽²⁹⁾。したがって当然の事ながら、空想における知覚現出は現世的自我および空想自我の両者にとってそれぞれ違った意味をもつこととなる。現世的な今の自我「*faktuelles jeztiges Ich*」に対しては、知覚現出とはみなされず準現前化作用として理解される現出がはめこまれる「*eingesetzt*」。この同じ現出は二重にとらえられる。それは空想自我に関しては知覚現出である⁽³⁰⁾。しかし現出は今の自我に関しては知覚現出の空想であり、かの情況における自我の空想と一致して現前化する自我に対して空想として現世的にはめこまれる⁽³¹⁾。ここで空想自我が現前化するの非現世性（空想性）においてであり、それは現世的自我が空想外部から反省する場合の現世性とは区別されねばならない。また逆に言えばこの区別があるからこそ、空想自我にとっての非現世性（空想性）は現実性「*Wirklichkeit*」を意味しないのである。つまり私が空想現出のうちへと身を置くととき、諸対象、諸事象は現実的「*wirklich*」意味でのここおよび今として⁽³²⁾は現れないのである。それでは空想現出が現実的なものではないというこの空想現出の非現実性を識別可能にするものは何か。ここに再現作用の意識の空想表象への本質的帰属性の問題が問われねばならなくなる。すなわち、空想表象が再現作用の意識においてある現出を描き出すということが、あらゆる空想表象の本質に属しはせぬ

のか⁽³³⁾ということが問われねばならなくなるのである。そしてその問いに対してフッサールは次のように答える。すなわち、現出する対象は再現作用の意識（準現前化されたもの）によって空想されたものであり、その際に体験された第一次的「*primär*」諸内容は色などである。再現されたものはそれだけでは体験されない第一次的な内容⁽³⁴⁾のだから必然的に現出もまた知覚現出の再現作用としてとらえられる、と。このようにフッサールが再現作用の学説を導入するに際して注目すべき事は、再現されるものは対象のみではなく現出作用もまたそれに含まれるということである。ともかくも空想自我による統握とそれに対する現世的自我による反省の問題は再現作用の学説を介して深化せしめられ、それは再現作用の意識への反省という問題、つまり空想表象に対する反省の問題へと進展する。そして再現作用の意識についてフッサールは次のように語る。すなわち、再現作用の意識において対象はあたかもそれ自体そこにあるかのように「*gleichsam selbst da*」である。その対象はかくかくの現出においてかくかくの側面について等においてある。この現出は知覚現出ではなく知覚現出の再現されたものである。空想の意識は知覚ではなくあたかも知覚のよう「*gleichsam Wahrnehmung*」である。意識全体は準現前化された「*vergegenwärtigt*」ものであり再現されたもの「*Repräsentant*」である⁽³⁵⁾。と。したがって、空想表象つまり知覚を表象することは、空想のうちにある対象の現出を再現されたもの（しかしまだ表象すらされぬ知覚現出に対して）として受け取り、同様に空想措定（変様されたもの）⁽³⁶⁾を現実的措定の再現されたものとして受け取ることと同義である。こうした事が分析的に解明されう

るのは、再現作用の意識つまり空想表象を反省することによってである。再現作用の意識を反省することはそれに対して目を向ける[*hinblicken*]ことを意味し⁽³⁷⁾、この表象が存在しこの空想が存在することを知覚することを意味する。すなわち、私があるものを知覚するということを私が空想において表象するということ、それゆえ私があるものの知覚作用を表象するということに注目し[*achten*]たり気づき[*merken*]たりするときのみ、空想の意識はあたかも……のようにということ[*Gleichnis*]、再現されたものである。その場合に私は知覚作用を反省しうるのであり、知覚作用を再現されたものとみなしあるいは知覚作用を再現されたものとして見出す⁽³⁸⁾。したがって空想の意識を再現作用の意識たらしめるものは、空想の意識に対して注目することあるいは気づくことという現世的自我の反省的機能だといえる。勿論私が再現作用の意識を、空想表象を反省するとき、それは一つの現世的に知覚されたものであり今であり、そこには非現世性(空想性)と現世性という時間意識の位相的識別が存在する。おそらく一九〇四年のものと思われるこの遺稿においては既に、ある時間意識が至る所で共に含まれているという時間意識の学説の萌芽が見出されるということも重要であるが、時間意識の学説および再現作用の学説をうみだす契機となる反省の可能性の探究の遂行がとりわけ重要な意義を担うものといえる。

次いで一九〇五年頃のものと思われる遺稿(b)想像、想起「についての[*von*]」現世的表象と想像、想起における[*in*]表象(想像的な対象をなすもの)。空想における反省」においては、遺稿(a)においてなされた反省の可能性の探究がさらに綿密に押し進められる。遺

稿(a)においても反省の可能性については次のように述べられている。すなわち、反省の可能性が知覚の本質に属する。つまり対象に注目するかわりに私は対象の知覚作用、対象の自己現出作用[*Selbsterscheinung*]およびそこにあるものとして受け取られることおよび信憑されることに對して注目しうる。空想の本質には対象に注目するかわりに対象の現出、対象がそこにあるものとして空想されること、対象が空想において信憑されることに對して注目するという可能性が属する⁽⁴¹⁾。したがって知覚および空想にはそれぞれ反省の可能性が本質的に帰属することが主張されていたわけだが、遺稿(b)の時点に至っては知覚および空想との関連において反省の諸々のあり方の分析が類型的により綿密に遂行されるわけである。但し、

この分析において空想[*Phantasie*]のかわりに想像[*Imagination*]という語が用いられているが、両者はこの場合知覚と対置されるという意味において同じものとみなしてもよいだろう。ところでこの分析において掲げられる主要な三つの類型は、(α)あるものAの想像の知覚、(β)あるものAの知覚の想像、(γ)あるものAの想像の想像⁽⁴²⁾である。先ず(α)Aの想像の知覚、について見てみよう。(α)についてフッサールは次のように語る。すなわち、勿論Aの想像は対象化される⁽⁴³⁾。想像を遂行することと想像を知覚の対象とすることは別のことだ、と。したがってAの想像の知覚とはAの想像を対象化することであり、Aの想像を反省的に把握することである。次に(β)Aの知覚の想像、について見てみよう。(β)についてフッサールは次のように語る。すなわち、Aの知覚の想像は何を意味するのか。勿論Aの知覚に對して想像的な対象をなすものではない。それは単にAの想像的意

識であるにすぎない。ここでは至る所でまさにそうであるように「……についての」ということが、つまり「……についての知覚、……についての想像（対象化する）」ということが考えられているのだ。それゆえ私は想像しその際に対象化する。つまりAの知覚である⁽⁴⁴⁾と。したがってAの知覚の想像とはAの知覚を想像しつつ対象化することであり、Aの知覚を想像しつつ反省することである。ここで (α) Aの想像の知覚と (β) Aの知覚の想像とを対比的に検討してみれば、前者は「想像に対する現世的反省」であり後者は「知覚に対する変様された仕方での反省」つまり「知覚に対する空想における反省」である。⁽⁴⁵⁾前者はこの遺稿(b)に先立つ遺稿(a)における「空想表象作用に対する反省」と同じである。それゆえこの遺稿(b)において斬新で注目すべきものは、後者の「空想における反省」[Reflexion in der Phantasie]である。そして実はこの「空想における反省」の主題化こそフッサールの現象学の方法論にとって決定的な意義をもつのではないかと思われる。フッサールは遺稿(a)において空想表象に対する反省を現世的知覚としてとらえ、現世的に知覚されるものは「心[Gese]」の領域に属すると言っているが、この事は現世的知覚という反省的方法を以てしては心理学的色彩を帯びた内容しか把握することができないということにフッサールが気づいていたことを証示しうるのでないのか。そうだとすれば遺稿(b)において主題化される空想における反省という方法の導入は、心理学的色彩を払拭し現象学的内実を獲得せんとする大いなる飛躍の企図とみることもできるのではないのか。つまり空想における反省という方法が、現象学的還元という方法論を具体的に遂行するうえ

での屋台骨を背負うことになるかとみることができないのではないかということである。しかしこの重大な問題は本稿の論考が進展してゆくにつれて明らかにされてゆくであろう。ともかくもここで (α) Aの想像の知覚と (β) Aの知覚の想像との間には、現世的反省と変様された反省という截然たる区別があることを銘記しておかねばならない。ところで変様された反省において反省さるべきものは知覚ばかりではなく、想像もまた反省さるべきではないのか。この問題がまさに三つめの類型(7)Aの想像の想像において問題にされるのである。フッサールはこの遺稿(b)において空想の空想[Phantasien-Phantasien]（第二の変様[zweite Modifikation]）は可能ではないというそれ以前の想定に苦悩していたのであるが、この遺稿(b)におそらく一九〇八・〇九年に付加されたと思われる箇所において次のように語る。すなわち、Aの想像についての想像は、Aの想像の変様と混同されてはならない。前者の場合にはAの空想表象を対象にも一つの空想表象であり、後者の場合には端的な知覚Aに対する端的な空想Aと同じ関係においてAの空想表象に対してあるAの空想表象の一つの変様である⁽⁴⁸⁾と。したがっておそらく一九〇八・〇九年の時点で、フッサールは空想の空想は可能であるという結論に達していたといえるであろう。そしてここにおいてフッサールは空想の空想を二種類に、つまり「Aの想像についての想像」と「Aの想像の変様」とに峻別している事に注目しなければならない。前者は「想像に対する変様された仕方での反省」ないし「想像に対する想像における反省」であり、後者は「想像に対する単なる変様」である。この両者の区別に関してはおそらく早くとも一九〇九年、場合によ

つては一九一二年のものと思われる遺稿(Ⅰ)空想についての知覚(反省)と空想についての空想⁽⁵²⁾においても主題化されている。但し、この遺稿(Ⅰ)においては遺稿(a)および遺稿(b)における「空想に対する現世的反省」に相当するものとして「空想についての知覚」という語句が用いられ、また遺稿(b)における「想像の変様」に相当するものとして「空想についての空想」という語句が用いられ、さらに遺稿(b)における「想像についての想像」に相当するものとして「空想についての知覚の変様」という語句が用いられている。⁽⁴⁹⁾ここで「空想についての知覚の変様」は「空想についての知覚」が変様されたものであり、換言すれば「空想に対する変様された仕方での反省」は「空想に対する現世的反省」が変様されたものであるということである。このような現世的反省と空想された仕方での反省との間の変様の関係については、遺稿(b)において既に次のように明言されていた。すなわち、現世的反省に変様された反省が対応し、その変様された反省は「Aの知覚についての空想」という意識である⁽⁵⁰⁾。したがって現世的反省と変様された仕方での反省との間には知覚とその変様としての空想との関係と類比的な関係がある⁽⁵¹⁾。それゆえ「空想についての知覚の変様」つまり「空想に対する空想における反省」においては、現世的反省のうちにある空想は空想の空想[Phantasia-Phantasia]のうちでの変様へと変化することを求められ、第二段階の空想[Phantasia zweiter Stufe]の存在を是認せざるをえなくなる。この「第二段階の空想」たる「空想の空想」の是認は、遺稿(a)での空想表象に対する現世的反省のもつ欠陥の、すなわち心理学的色彩を払拭しきれぬという欠陥の克服へと至らしめる契

機となったといえるであろう。つまり空想表象に対する現世的反省において心理学的色彩を帯びた内容として把握される空想は、空想の空想のうちに変様せしめられることにより現象学的内実として把握されうるようになるのである。やはりまさに現世的反省をなす態度から空想における反省をなす態度への態度変更こそ、自然的態度から現象学的態度への態度変更だといえるのではあるまいか。そうだとすれば空想の空想の存在に対するフッサールの是認によって初めて、現象学的還元を具体的に遂行する方法としての「空想における反省」の射程は十分に拡張されたとはいえるのではないのか。つまり空想において反省さるべきもの、換言すれば現象学的に分析さるべきものは、知覚ばかりでなく空想にまで拡張されたのである。したがって現象学の方法にとって変様およびさまざまな変様の系列は重要なものとなる。おそらく早くとも一九〇九年、場合によっては一九一二年のものと思われる遺稿(Ⅱ)「知覚現出-空想現出-空想における空想現出」という変様の系列は一連の反復される変様であるかどうか⁽⁵³⁾においては、次のような問いが立てられる。すなわち、人は実際、知覚現出、空想現出、空想における空想現出というこうした変様の系列を一連の反復される変様として記述しうるのか⁽⁵⁴⁾。と。そしてそれに対する答えとして、フッサールは変様系列の反復を可能なものとして認め、その重要性を洞察している。

これまでの論考から明らかなように、一九〇四年の時点で時間意識の学説の萌芽が見出されるとともに再現作用の学説の導入がなされ、それに伴ってその後遂行されることになる諸々の反省のあり方に対する諸分析の契機となる現世的反省についての分析が企図さ

れたことは、フッサールが現象学的還元という方法論を着想するうえできわめて重要な礎石となった。そしてそれを踏み台として一九〇五年に「空想における反省」に対する分析が遂行されたのだが、そこには同時に「現象学的還元」という理念の最初の萌芽があったものと思われる。現象学的還元という理念の着想が空想における反省に対する分析と密接不離なものと考えれば、フッサールが一九〇五年から一九〇九年ないし一九一二年に至るまで執拗に空想における反省について究明しようとしたこともうなずける。そしてまた、フッサールが空想における反省を分析する際に現象学的還元理念を着想したということを裏づける証拠もある。それはおそらく一九〇五年のものと思われる遺稿(c)空想における反省(および現象学的還元)である。それにおいてフッサールは次のように語っている。すなわち、私は「空想において反省する」ことができ、そしてまた空想において現象学的に還元しうるように、私は空想現出の「内容」に目を向ける[*hinblicken*]ことができるのであり……と。したがって空想において反省することによって現象学的還元が可能となるのであり、現象学的内実を目を向けることが可能となるのである。

フッサールはまた遺稿(c)において、「空想における反省」つまり「空想しつつ反省する空想作用」について次のように語っている。すなわち、空想作用は現前化作用の変様である(そしてこの意味において知覚作用である)統握作用として遂行され、しかも例えば家の知覚作用の準現前化作用(しかも家が現世的に与えられていることに相関するものの準現前化作用)を変様のうちへ入り込んで見る

[*In die Modifikation hineinschauen*]ということが明証的な正当性をなすというような変様として遂行される、と。したがって空想における反省を行うということは、まさに「変様のうちに入り込んで見る」ということである。但しその場合、「変様のうちに入り込むこと」は「自分がある立場に置いてみること」としての「アインレーベン」[*Einleben*]⁽³⁷⁾を意味しない。アインレーベンは例えば小説の登場人物の立場に身を置くことであるが、空想における反省の場合にはアインレーベンのように反省さるべきものとしての空想されたもののうちへと素朴に入り込んでしまうことは許されない。むしろ空想における反省の場合には反省さるべきものがアインレーベンの形式で空想され、それとは位相を異にして空想しつつ反省する主体が空想のうちに立つのである。それゆえ「変様のうちに入り込むこと」とは、このように「変様(空想)のうちにある反省の場に立つこと」である。そしてこれこそ自然的態度から現象学的態度への態度変更に他ならない。それとともにまた、アインレーベンの形式で空想されたものと空想のうちにで変様された反省の眼差しとの位相的差違こそ、エポケーの可能的条件に他ならぬのではないのか。

しかしまたここで、「変様のうちに入り込んで見る」という場合の「見ること」が問題である。遺稿(a)について既に述べた通り、現世的自我による「注目すること」は空想の意識を再現作用の意識たらしめるものとして根本的な機能をなしたのだが、変様のうちにある反省的自我による「注目すること」は如何なる機能を果たするのだろうか。

おそらく一九〇七・〇八年のものと思われる遺稿(d)二通りの知

覚「二通りの空想」においては、「注目すること」に関して次のように述べられている。すなわち、注意作用「Aufmerken」は私が単に体験する例えば家の空想現出（空想意識）を家へと向かって通り抜けてゆく「hindurchgehen」。注意作用はさらに内的空想を通り抜けてゆきうる。他方、私は体験しつつ家を注目する「achten」ことができる。そしてまた私は知覚現出に關係し、この知覚作用において知覚現出に注目することができる⁽⁵⁸⁾。と。この遺稿(d)においては「空想における反省」に対して「内的空想『innere Phantasie』」という語句を用いているが、この変様された仕方での反省において注意作用は空想において反省さるべきものとしての空想されたものを貫くとともに、さらにそれを対象化する反省作用をも貫くのである。そして、おそらく一九〇八年のものとと思われる遺稿(e)二重の準現前化作用。「あるものの空想」に対して「あるものの再生作用」（空想表象）においては、「空想における反省」における「注意」についてさらに次のように語られる。すなわち、注意「Aufmerksamkeit」は同時に現世的にしかも変様されずに空想された家へと向かう⁽⁵⁹⁾。と。したがって空想における反省においては反省さるべきものがアインレーベン⁽⁶⁰⁾の形で空想されるのもちろんのこと、反省作用自体も空想的に変様を被るのであるが、注意は現世的にしかも変様されることなく反省さるべき空想されたものと変様された反省作用とを貫くのである。それゆえ「空想における反省」における「注意」は、空想における反省を遂行する自我の現世的注意であり、それ自体は変様されぬままである。しかしこの場合の現世性は遺稿(a)および(b)で扱われた現世的反省の場合のように現実性を意味するものではなく、

空想のうちにある反省的自我の現世性である。それゆえ「空想における反省」においてこそ「注意」は現実性の制約を免れ、同時に空想性の制約を免れ、中立的に専ら現象学的内実を把握しようとするのである。また、フッサール自身遺稿(e)において次のように語っている。すなわち、私が遂行する反省は何ら現実的反省ではなく、知覚についての知覚の再生作用（それゆえ反省の再生作用）であり、それは「空想において反省すること」である⁽⁶⁰⁾。と。したがってフッサールは、「空想における反省」を「知覚についての知覚」つまり「現世的反省」の再生作用としてとらえるのである。それゆえフッサールが一九〇四年から一九〇九年ないし一九一二年にかけて究極的に導入しようとしたこの「再生作用の学説」とは、まさに現象学的還元という理念の具体的実現をめざすものであったといえるのである。

注

- (1) HUSERLIANA BAND XXIII: PHANTASIE, BILDBEWÜSTSEIN, ERINNERUNG (Hrsg. von EDUARD MARBACH, 1980)
- (2) ibid. S. XXV
- (3) 一八九八年の論文の今なお保存された断片がBeilage I “Phantasie und bildliche Vorstellung” として Band XXIII に収められている。
- (4) Band XXIII S. XXXV
- (5) 一九〇四・〇五年の冬学期にゲッティンゲンで行われた週四

時間の講義で、(1)「知覚の瞬間」、(2)「注意、メンタチエス的思考などについて」、(3)「想像と像意識」、(4)「時間の現象学について」の四部から成る。それぞれのなかで(3)は Band XXIII Nr. 1 に収められ、(1)と(2)は HUSSERLIANA BAND X; Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins (Hrsg. von Rudolf Boehm, 1966) に収められている。

- (9) Band XXIII S. XXXV (7) *ibid.* S. XXVI
 (8) Vgl. *ibid.* S. XXXVII (6) *ibid.* S. LIII
 (10) *ibid.* S. 7; Vgl. S. 10 (11) Vgl. *ibid.* S. LIII
 (12) *ibid.* S. 92 f. (12) *ibid.* S. 93
 (14) *ibid.* S. LIV (15) *ibid.* S. LIV
 (16) Vgl. *ibid.* Beilage I (1898) (17) *ibid.* S. LIV
 (18) *ibid.* S. LV (19) *ibid.* S. 86
 (20) *ibid.* S. LIX (21) Vgl. *ibid.* S. LIX
 (22) *ibid.* S. LIX (23) *ibid.* S. LX
 (24) *ibid.* Haupttext Nr. 8 (25) *ibid.* S. 265 f.
 (26) *ibid.* S. LXII (27) *ibid.* S. 172
 (28) *ibid.* S. 172 (29) *ibid.* S. 173
 (30) *ibid.* S. 174 (31) *ibid.* S. 174
 (32) *ibid.* S. 170 (33) *ibid.* S. 174
 (34) *ibid.* S. 174 (35) *ibid.* S. 175
 (36) *ibid.* S. 177 (37) *ibid.* S. 174
 (38) *ibid.* S. 176 (39) *ibid.* S. 177
 (40) *ibid.* S. 178 (41) *ibid.* S. 177

- (42) *ibid.* S. 181 (43) *ibid.* S. 181
 (44) *ibid.* S. 181 (45) Vgl. *ibid.* S. 182 f.
 (46) Vgl. *ibid.* S. 172 (47) Vgl. *ibid.* S. 184
 (48) *ibid.* S. 184 (49) Vgl. *ibid.* S. 191 f.
 (50) *ibid.* S. 183 (51) Vgl. *ibid.* S. 192
 (52) Vgl. *ibid.* S. 192 (53) *ibid.* S. 192
 (54) Vgl. *ibid.* S. 192 f. (55) *ibid.* S. 187
 (56) *ibid.* S. 186 (57) *ibid.* S. 179
 (58) *ibid.* S. 189 (59) *ibid.* S. 190
 (60) *ibid.* S. 191 (61) *ibid.* S. 191

(ほり・えいぞう 筑波大学大学院哲学・思想研究科在学中)